

井上靖小説全集

16

井上靖小説全集

16

蒼き狼・風濤

〈井上靖小説全集16〉

昭和48年2月20日発行

昭和55年12月30日4刷

定価 1400 円

© Yasushi Inoue, 1973,
Printed in Japan.

著 者 井 上 靖

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
電話・業務部(〇三)二六六一
五一一一、編集部(〇三)二六
六一五四一一 郵便番号・一
六二 振替・東京四一八〇八

印刷所 二光印刷株式会社
製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、御面倒で
すが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担に
てお取替えいたします。

蒼^{あお}き狼一
章

西紀一一六二年のことである。黒竜江はその上流に於て、オノン、ケルレンの二つの支流に岐れるが、その流域の草原地帯や森林地帯に居住する遊牧民モンゴルの聚落の首長の幕舎（包）に、一人の男児が生まれた。産婦はホエルンと呼ばれる、まだ二十歳を幾つも出ない若い美貌の女性であった。時たまこの聚落の男たちは、この地方で長く相争つて来た他部落のタタル族との合戦のために全部出払っていたので、聚落の何百という幕舎の中に居るのは、老人か女子供たちばかりであった。

ホエルンは、男児の誕生を部落から十里程離れた戦線に居る夫のエスガイのもとに報じるために、一人の老いた下僕を幕舎から送り出した。ホエルンは夫への使者を出して

から、改めて自分の腹から出たばかりの嬰兒の顔に眼を当てた。嬰兒は襁褓布の中に転がされてあった。嬰兒を取り上げた女たちも開かすことのできなかったその左の手指は相変らず固く握りしめられたままになっていた。ホエルンは自分の産んだ子の四肢が完全であるかどうかを確かめようとする母親の持つ本能的な執拗さで、その握りしめられた左掌を何とかして開かせようと思った。それは少しの粗暴さも許されぬ、非常に繊細な注意を要する仕事であった。ホエルンは時折、嬰兒の掌から手を離すと、幕舎の上をこうごうと吹き過ぎて行く風の音を聴いた。風は大河の流れのようにあるポリウムを持った物体として、東から西へと地軸を揺り動かしながら移動して行くのが感じられた。風の流れが絶えると、その度にホエルンは自分が身を横たえている幕舎と対い合っている漆黒の夜空の高さを思い出し、そこに無数の星が鑲められて、その一つ一つが冷たい光をもって輝いている様を眼に浮かべた。が、やがて次の風が吹き荒れて来ると、星を刺繍した黒い布地は吹きまくられ、星はちりぢりに四散して、あとは天地を埋める風の音だけになった。風が吹こうと、星空が幕舎に覆いかぶさるうと、孰れにしてもホエルンは、自分がいまひどく小さくて貧しい幕舎の中に居るといふ思いを持っていることには変りなかった。

この自分たちが大自然の中の無力な小さい点であるという思いは、牧草を求めて転々とし、定住する家屋も、定住する土地も持たない遊牧民たちの誰もが必ず心の底のどこかに持っていて、いかなる行動もいかなる考えをも、結局はその根底に於てそれを支配する民族の呪文（じゅもん）のようなものであったが、この夜のホエルンの場合は、そうした周辺のない孤独な思いを一層強める他の理由を持っていた。この夜のホエルンには幕舎を透して夜空は一層高く見え、幕布を揺り動かす風の力は一層狂暴なものに感じられた。

母になった許りのホエルンは、いま二つのことに心を傷めていた。一つは自分が産んだ嬰兒が、充分に夫エスガイを満足させるような完全な体軀（たいく）を持ったものであるかどうかということ、それからもう一つは、嬰兒が夫エスガイを充分納得させるように彼に似た眼鼻立ちを持っているかどうかということであった。

併し、この二つの心配事のうちの一つは、やがてホエルンの心から取除かれることができた。嬰兒は母親の掌の中で、それまでそこに預けていた自分の小さい手指を、恰も（たまた）それが自分の意志でもあるかのように自分で開いたのである。嬰兒は髀石（せき）（獣骨の玉）の形をした血の塊りを、勲章でも握りしめるように確り（じか）と握りしめていたのであった。もう一つの心配事である生まれただけの嬰兒の顔容（かおかたち）に

ついては、ホエルンはその嬰兒が夫エスガイの子であるといういかなる証拠も確信も、そこからは得ることができなかった。嬰兒はエスガイに似ているようでもあり、似ていないようでもあった。それと同様に、ホエルンのこうした悩みのもととなっている、もう一人の男の顔にもまた、似ているとも似ていないとも言えなかった。はっきり言えば、嬰兒は誰にも似ていなかった。ただ一人、自分が体内から出た母親だけに似ていたのである。

ホエルンはエスガイが嬰兒の誕生を知って、それに対していかなる氣持を持つか、全く想像はつかなかった。エスガイは、妻の妊娠に対するに、終始この部族の勇者が例外なく持っている寡黙（かもく）と無表情とをもっている。悦んでいるのか、怒っているのか、その内心の感情は、一切本人以外の何人も窺（うかが）い知ることとは出来なかった。併し、嬰兒の出生を報告することによって、ホエルンはそれに対する夫の言葉を初めて聞くことが出来る筈であった。例え殺せという言葉が彼の口から出たとしても、さして不思議とすることではなかった。

エスガイの許に遣わされた老僕（らうはく）は次の日の夕方幕舎へ戻って来た。そして彼は若き母親にエスガイが嬰兒のために選んだ鉄木真（てつぎ）という名前を伝えた。ホエルンはそれを聞いて出産後初めて安堵（あんどう）の色を面に浮かべた。少なくとも、夫

エスガイが、自分の産んだ子供に対してその存在を呪うほどの憎しみを持っていないということだけは判ったからである。併しそれ以外のこととは、やはり一切不明であつた。何故なら、老僕の話によれば、鉄木真という名の謂われは、ホエルンにとつて如何ようにも解釈される意味を持つたものであつたからである。

「わしがエスガイ様の陣に到着した時は、丁度タタル部族をさんざんにやつつけて戦捷の宴を張っている時だつた。篝火の傍には敵の首領株の者が二人捕虜にされて縛られていた。酒宴も半ばと思われる頃、その首領の一人は引き出されて首を刎ねられたが、エスガイ様はこんどの戦捷を記念する意味で、その首領の名テムジンを生まれた子につけよとの仰せじやつた」

老僕はそう語つた。戦捷を記念するという意味をそのまま素直にとればそれでもよかつたが、併しその名が首を刎ねた敵方の首領の名であると判つてみると、ホエルンとしてはそこに何か釈然としないものがあるのを感じないわけには行かなかつた。エスガイが嬰兒の出生を悦んでいるか、憎んでいるかは、依然としてホエルンには謎であつた。

併し、兎に角こうして、母親さえその父親をはつきりと知らぬ一人の嬰兒は、鉄木真と名付けられ、モンゴル部族の一人の頭領の長子として帳幕の中に生い育つ運命をここ

に与えられたわけであつた。

ホエルンはそれから何日間かを、産後の病患のために高熱に苦しみながら生死の間をさまつた。そして熱がとれて漸く一命を取りとめたとき、彼女の弱々しい眼が初めて捉えたものは、夫エスガイが嬰兒鉄木真を抱き上げて立っている姿であつた。

ホエルンがエスガイの妻となつたのは、その時から十カ月前のことであつた。ホエルンはオルクヌウト部族の出であつたが、メルキト部族の若者に掠奪され、メルキトの聚落に拉致されて行く途中、オノン河畔に於て、エスガイの手に依つて二重の掠奪を受け、ついにエスガイの妻となつたのである。ホエルンはメルキト部族の若者にも十数回に互つて犯されていたので、エスガイの妻となつてからの出産ではあつたが、生まれた子が二人の男性の孰れを父とするかを定めることはできなかったのである。

ホエルンは鉄木真を抱いている夫の横顔に眼を当て続けていた。エスガイは通常エスガイ・バガトル（勇者エスガイ）と呼ばれ、豪胆と勇武とをもつて鳴り、他部族から怖れられている人物であつた。そのエスガイの精神な横顔からは、相変らずいかなる愛情も汲み取することはできなかったが、ホエルンは夫が鉄木真を自分の大きな腕の中に抱きとっているということで、さすがに物とする思いを持った。

そしてその吻とする思いは次第にはつきりと自分でも説明できない強い感動に変わって行き、それがホエルンの頬を涙で濡らした。

当時モンゴル部族が生活を営んでいた中国の万里の長城以北の地、所謂塞外の地には、何種族かの遊牧民族が各地に屯していた。この地は東方を興安嶺に依って、西方をサヤン、唐努、アルタイ、天山の諸山脈によって大きく遮られ、南方は万里の長城に依って中国に、ゴビ沙漠に依って西域に隣接していた。また北方はバイカル湖付近を境として、シベリヤの底知れぬ無人地帯へと飲み込まれている。

そしてこの大山脈と沙漠と無人荒蕪の地に囲まれた広大な高原には六本の河が流れていた。オノン、インゴタ、ケレンの三河は合して黒竜江となつてオホーツク海に注ぎ、トウラ、オルコン、セレンガ河の三流はいずれもバイカル湖にはいつている。これらの二水脈はみな中部の高原地帯から発し、その流域は草原地帯や森林地帯を形成していて、往古から各種の遊牧民族がここに興り亡んでいた。匈奴も、柔然も、突厥も、回鶻もこの地を根拠地として、唯一の出口である南方へ勢力を張ろうとしたので、中国の歴代の為政者たちは万里の長城を構築して、北方遊牧民の寇略に備えなければならなかったのである。

モンゴルがいつの頃からこの地に移り住んだかは不明であるが、八世紀前後には他の諸聚落と共に突厥の勢力下に、八世紀中葉は突厥に替つた回鶻に隸属し、九世紀以後は回鶻に替つた韃靼の支配下にあった。併し、韃靼が衰えた以後は、それぞれ頭髮と皮膚の色と多少の習俗とを異にした幾つかの血の違つた民族がそれぞれ聚落をなして広大な高原のあちこちの草原地帯にばら撒かれ、一年中畜群と婦女と牧草の奪い合いに明け暮れていた。

鉄木真の生まれた十二世紀の中葉には、モンゴル部の他に、キルギス、オイラト、メルキト、タタル、ケレイト、ナイマン、オングートといった諸部族がこの蒙古高原地帯の住民たちで、その中でモンゴルとタタルの二部族がこの高原地帯に於ける諸聚落の指導権を握ろうとして、絶えず小戦闘を繰返していた。鉄木真の生まれたのは、この二部族の闘争の最中であつたのである。

こうした異部族間の闘争の他に、同一部族内に於てもそれぞれ、仲間の利益のために骨肉相食む争いを繰返していた。モンゴル部族も幾つかの氏族に分れ、各氏族は独立した聚落をもつて、ともすれば拮抗しがちであつたが、エスガイの属するボルジギン氏族は昔から一応モンゴルの本家筋に当る家柄となつており、全モンゴル部族の支配者とも呼ぶべき汗（主権者）を何人かその中から出していた。第

一代目の汗は鉄木真の曾祖父にあたるカプルで、この人物がそれまで統一なくばらばらになっていたモンゴルの諸部落を曲りなりにも一つに纏め、部落全体の利益のために他部落に当る体制を調えたのであった。二代目の汗にはタイチュウト氏族のアムバカイがなったが、三代目はまたボルジギン氏族に移り、エスガイの叔父クトラが汗となり、現在エスガイが四代目の汗になっているといった状態であった。

鉄木真はこうした情勢下の蒙古高原にあって、モンゴル部族の頭領の幕舎の中に生い育って行った。ホエルンは、鉄木真を産んでから二年おいてカサルを、更に二年おいてカチグンを産んだ。いずれも男児であった。鉄木真は四歳の時にこれらの二人の弟を持つにいたったわけであるが、この他に更に父エスガイが他の女に産ませた一歳違いのベクトル、二歳違いのベルグタイの二人の弟を持っていた。鉄木真は幕舎の中で、これらの同腹、異腹の弟たちと一緒に暮した。エスガイは子供たちには頗る公平であった。五人の子供たちをいつも平等に取扱ひ、誰か一人を特別に可愛がるというようなことはなかった。これはまたホエルンも同じことだった。彼女は自分が腹を傷めた三人の子供も、他の女に出来た二人の子供も、些かも区別するようなことはしなかった。ホエルンは夫が鉄木真に対して特別な扱ひ

をしなかったように、彼女も亦夫が他の女に産ませた子供たちを特別扱いにしなかった。そうした点から見れば、ホエルンは聡明な女であると言うことができた。

鉄木真が六歳の時、ホエルンはいもう一人の子供のテムゲを産んだ。六歳の鉄木真は同じ年齢の子供より躰が一回り大きく、腕力も強かったが、めったに口をきかないむつつりした子供であった。極く、たまにしか喧嘩をしなかったが、喧嘩をすると思いきった事をした。いつも相手の憎まれ口を眼を光らせながら黙って聞いていて、相手が喋るところがなくなつたと知ると、一言も口から出さないでいきなり襲撃した。相手を押し倒して、馬乗りになって石で殴りつけるとか、砂の中に頭を突っ込んで足で踏みつけるとかした。そうした攻撃の仕方には、どことなく残酷なものがあって、それを止めに来た大人たちの眼には、鉄木真は気心の判らない、可愛げのない子供に映った。そんな時大人たちは、鉄木真を自分等と同じ年齢の人間のように錯覚し、大人でも咎めるようにいつも鉄木真の方ばかりを叱った。

併し、そうした時を除けば、鉄木真は単に無口で目立たない子供であるに過ぎなかった。鉄木真は自分が年長だったので、母のホエルンを幼い弟たちに譲らねばならず、ホエルンの膝や腕に纏いつくというようなことはなかったが、やはり少しでも母に近いところに座を取りたい気持は、他

の子供たちと交りはなかった。

鉄木真が、初めて自分の部族の祖先の話やその伝承に耳を傾けたのは、七歳の時であった。遠縁に当る人物にブルテチュ・バガトルという老人があった。バガトル（勇者）の呼称を持っているくらいだから、ブルテチュは若い時は勇者であるに違いなかったが、その頃は頬にも頸にも白い髯を蓄えた子供好きの柔和な老人であった。この老人は優れた記憶力を持っていて、時折親族縁者の者たちがエスガの幕舎に集まる時など、何代も何代も前の祖先のことをみなに話して聞かせた。自分がその人物を実際に見知ってでもいるように、その人物の容貌風姿から性格まで詳しく話し、聞く者を倦かせなかった。

ブルテチュ・バガトルは人が集まりさえすれば、必ず自分の頭に詰込んであるものを糸でも手繰り出すように引張り出す役割を忠実に勤めた。それで、彼の話のある部分は多勢の者にすっかり覚えられていたが、併し、誰もブルテチュのようにうまくは話せなかったし、また彼のように際限もない程の長い話を頭にしまい込むことなど思いもよらなかった。

ブルテチュが語り出そうとする時、人々は口々に自分が記憶していることを先きに口から出そうとした。

——バタチカン、バタチカンの子がタマチャ、タマチャ

の子がゴリチャル・メルゲン、ゴリチャル・メルゲンの子がアウジャン・ボログル、アウジャン・ボログルの子がサリ・カチャウ、サリ・カチャウの子がエケ・ニドン、エケ・ニドンの子がセム・ソチ。

こんな風に一人が自分たちの祖先の代々の当主の名を口にしてここで詰まると、他の誰かがそのあとを続けた。

——セム・ソチの子がカルチュ、カルチュの子がボルジグタイ・メルゲン、ボルジグタイ・メルゲンはモンゴルジン・ゴアという美しい妻を持ち、その二人の間に出来た子が、トロゴルチン・バヤン、トロゴルチン・バヤンはボロクチン・ゴアというこれも美しい妻を持ち、他に若党ボロルダイ・スヤルビと二頭の駿馬（ウマ）を保持した。

一番記憶のいい者も大抵この辺で詰まった。これからあとは、つまり妻の他に二頭の馬と若党を持った十代目の当主トロゴルチン・バヤン（富者トロゴルチン）以降は急に子沢山になり、記憶しなければならぬ人物は急に樹枝状に大きく拡がり、もはやブルテチュの非凡な記憶力に俟つ以外仕方がなかったのである。ブルテチュは人々が詰まると満足そうに皺の多い顔に笑みを浮かべ、そしてそこからゆっくりと話し出した。勿論ブルテチュの話はモンゴル家の歴代当主の名前を単に羅列するだけではなかった。

「トロゴルチン・バヤンと細君のボロクチン・ゴアはえら

く仲のええ夫婦じゃった。あんまり仲がよすぎたので、一つ眼玉の子ができた。そこでドワ・ソホル（盲人ドワ）と名を付けた。一つの眼は額の真ん中に縦についていたが、これがまたよく利く目玉で、嘘のような話だが三日行程の向うまで見ることができた。ドワ・ソホルのあとにはドブ・メルゲン（能射者ドブ）が生まれた。やがて二人はいい若い若者になった。ある時兄弟は狩りに出たが、ドワ・ソホルは平原を見渡して、遠くをええ女子（おぢ）が通っている、嫁に行くところらしい。明日あたりここを通るから、ここへ来た時かっぱらって、ドブ・メルゲンよ、お前の嫁にするがいいと言った。ドブ・メルゲンは本当にしなかったが、翌日その場所へ行って待っていると、本当に嫁入りの娘を真ん中にした一団がやって来た。若者は弓を引き、刀を揮って、彼等に襲いかかった。アラン・ゴア（美女アラン）がドブ・メルゲンの妻になったのはこうした経緯（いきさつ）じゃ。二人の間にはすぐ二人の子供が生まれた。兄がベルグネテイ、弟がブグネテイ。それぞれベルグネット氏、ブグネット氏の祖先になるわけじゃ。さて、アラン・ゴアを手に入れたドブ・メルゲンだが、この人は惜しいことに若くして妻と二人の子供を残してみまかった。併し、アラン・ゴアは二人の子供を育てながら、次々と三人の子供を産んだ。夫はなくても幾らでも子供はできる。と言って、

アラン・ゴアは貞淑な女だから、決して男などは作らぬ。どうして子が出来たかと言うと、いつも妊娠する前に、天の一角から光が射して来て天窓からはいり、アラン・ゴアの躰（からだ）の白い肌に触れる。こうして生まれたのがブク・カタギ、ブカト・サルジ、ボドンチャル・モンカク、それぞれカタギン氏、サルジカト氏、ボルジギン氏の祖先じゃ。ボドンチャル・モンカクの流れを汲むわれわれボルジギン氏族の者の躰には、だから、美女アランの血と天の光が入り混じってはいっているわけじゃ」

こうした調子であつた。そしてボドンチャル以降の歴代の勇士の武勇談を、ブルテチュは次第に詳しく、次第に生き生きと物語った。ボドンチャル以降、現当主エスガイまで十代あつて、語るべきことが沢山あつたので、とても一晩では語り尽すことはできなかった。

七歳の鉄木真には、一つ眼のドワ・ソホルの話だけが印象的で、その他のことはたいして興味も惹（ひ）かなければ、よく理解もできなかった。それよりも、部族全体の何かの大きな集会の時、ブルテチュもその一員となつて何人かの古老たちが、幕舎の前の広場でモンゴルの源流に関する伝承を祈禱（きとく）のような形で唱和することがあつたが、その時聞く祈禱の文句の内容の方が、鉄木真にはずっと面白かつた。

——上天より命（いのち）ありて生まれたる蒼き狼（おれおろ）ありき。その妻

なる慘白き牝鹿ありき。大いなる湖を渡りて来ぬ。オノン河の源なるブルカン嶽に營盤して生まれたるバタチカンありき。

それはそうした唱和で始まる短い文句で、間もなく煩瑣な儀式の中に吸収されてしまうものであったが、ここに唱われる狼と牝鹿の交配によって最初の祖先バタチカンが生まれたという伝承は、ボルジギン氏、タイチュウト氏とを問わず、全モンゴル人の心に、それが語られる度にいつも異様な感動を呼び起すものであった。人々はみなこの話を信じていた。大いなる湖というのはずっと西方にあるもので、逞しい狼はそこを神の命に依って渡って来、優しく美しい牝鹿を妻としたというのである。ブルカン嶽というのは部族民の誰一人知らぬ者のない山であった。モンゴル部の者はどこへ幕舎を移動しようと、生まれてからずっと毎日のようにこのブルカン嶽を仰いで育って来たのである。

鉄木真も、この蒼き狼の話から大きい感動を受けた。鉄木真は自分が狼と牝鹿の子孫であるということに満足であり、そうではない他部族のことを思うと、そうした他部族の者が哀れにも卑しくも思われた。要するに鉄木真は、自分の体内に狼と牝鹿の血が流れていることに大きい誇りを感じたのであった。

鉄木真がブルテチュを交えた何人かの古老の不可思議な

唱和を聞いたことは、彼の幼少時代に於ける一番大きい出来事であった。勿論、古老たちの唱和する言葉の意味は、七歳の鉄木真の頭では理解し難く、母のホエルンに依ってその意味を説明されたものであったが、鉄木真は古老たちが唱和している間、その低く厳かな歌声の中に大きく逞しい狼と、優しく美しい牝鹿の幻影を見ていた。狼は鋭い眼を持っていた。その眼は遠眼の利くドワ・ソホルのそれより遙かに遠くを見得る眼であり、それはそこに現われる何ものをも捉えて離さぬ、怖れというものを全く知らぬ眼であった。いかなるものにも立ち向かう攻撃精神と、自分の欲するいかなるものをも自分のものとする強い意志を、その冷たい眼の光は持っている。体軀は全く攻撃のためにつくられたものである。きりっと立った耳は、千里の遠くの物音をも聞き逃すことなく、その軀を構成している一片の骨も、一片の筋肉も、敵を屠るための目的にそぐわぬものはない。細く強靱な四肢は、必要とあらば雪原を駆け、強風の中を走り、岩を攀り、宙を跳ぶ。

その狼の直ぐ傍には、美しい毛皮で包まれた華奢な体軀を持った牝鹿がつき添っている。鹿は栗色の毛並に白い斑点を散らし、口許も白い毛で覆われている。狼とは違って優しい眼を持っている。併し、彼女はその眼を絶えずくると動かし、全身を神経にして、自分の愛する夫を外敵

から守ろうとしている。鹿は自分を美しく見せることによって狼に奉仕すると共に、瞬時たりとも警戒の心を解くことなくして、また夫に仕えている。風による木の葉のそよぎ一つにも、油断なくその方へ長い顔を向ける。攻撃心というものは凡そその片鱗をも持ち合わせてはいないが、防禦の態勢は完璧である。

この全く異った二つの生きものは、いずれも鉄木真の小さい心を魅するに充分な美しさを具えていたのである。そしてその二つの美しい生きものから最初の祖先バタチカンが生まれ、狼と牝鹿の血は長い歳月にわたって多勢の祖先たちの血を流れ流れて、いま自分の体内をも流れているのである。

この話を知ってから鉄木真は、ブルテチュの語るいかなる話も、——それを鉄木真は次第に自分自身の頭で理解するようになって行ったが——もはやそこからは何の魅力も見出さなかった。鉄木真は、ブルテチュがボルジン氏族の者の群の中に美女アランの血と、天から射し込んで来た光が混じり合っているという話を何回もするのを聞いたが、語り手が誇りやかに話すその話も狼と牝鹿の話に較べれば、遙かにつまらない光のないものに思われた。自分たちボルジン氏族の者が他のモンゴル人より天の光のために優れているということは、勿論鉄木真にとっても嬉しくないこ

とではなかったが、併し、全モンゴル人の血の中に等しく分け与えられている狼と牝鹿の血の方が、鉄木真にはずっと素晴らしいことに感じられた。それを支えているものは全モンゴルという大きな脈がりを持った台であった。

鉄木真が八歳になった春、ホエルンはまた一人の子供を産んだ。こんどは女兒でテムルンと名付けられた。鉄木真はこの時初めて、テムルンの体内にもまた狼と牝鹿の血が流れているのであろうかという疑問を内部に含んだある感概に打たれた。狼と牝鹿の血は、カサル、カチグン、テムグの三人の同腹の弟たちの血にも、またベクテル、ベルグタイの異腹の弟たちの血にも流れている筈で、それが彼等に流れているということにはいささかの不思議な気持も持たなかったが、妹テムルンの場合だけは何か納得できない気持があった。

このテムルンが出生した時鉄木真が思いがけずぶつかった戸惑いは、それから八歳の鉄木真に大人も子供も含めてなべて女というものを、それまでとは違った眼で見させるようになった。女には牝鹿の血は流れているかも知れなかったが、狼の血が流れているとはどうしても考えられなかった。鉄木真はある時ホエルンにそのことを糺してみたが、

「男も女も何が異なりますか。モンゴルの人たちは男

も女も、みんな先祖の血を受け継いでいます」

ホエルの答えはこうであった。鉄木真には母親のそうした答えは甚だ不満足であった。鉄木真は突き飛ばせばすぐに蹣跚^{たんな}き、殴りつければすぐ倒れて泣き出す女というものを、自分たち男と同一に考えるのは納得の行かないことであつた。一緒にすることは厭^{いと}だつた。戦鬪にも出て行けぬ弱者が、どうして天の命に依つて西方の湖を渡つて来た狼の血を承^つけついでいると言えらるであらうか。

鉄木真は女の子たちとは決して遊ばなかつた。遊ばないばかりか、よほどの用事でもない限り口もきかなかつた。弱い者への輕蔑^{けいべつ}というより、弱者でありながら同じモンゴル人の血の所有を主張していることに對する反感と、憤懣^{ふんざん}が、八歳の少年の心に根を張つていたのである。

この時期から、鉄木真の眼は急に自分の周囲のものを見るといった見方で見えるようになって行つた。躰^{からだ}の發育も他の少年たちに較べると早かつたが、無口で荒つぽい少年は精神的にもそれに劣らず早熟であつた。

鉄木真は沢山のことを知ろうとし、實際にまた沢山のことを知つた。父のエスガイや母のホエルの交わす会話に、これまでと別段変化がある筈はなかつたが、それらのものはいまや鉄木真にとっては全く別のものになつた。鉄木真は二人の会話から、自分たちのボルジン氏族がいかな

る家系と歴史を持つてゐるか、そしてまたボルジン氏族の者たちがモンゴル部族の中でいかなる地位を占めてゐるか、更に広くモンゴル部族が蒙古高原^{もんこく}の住民たちの中でのいかなる立場に立つてゐるか、そうしたことを知ることができた。それからまた、聚落の男女の会話からも、聚落の小集会や部族の大集会に於ける部落民たちの言動からも、実に多くのことを、海綿が水を吸い取るように少年の感受性は吸い取つて行つた。鉄木真は少年から大人へと心も躰も移行しつゝあつたのである。

鉄木真は先づ同じモンゴル部族の中で、自分の属するボルジン氏族が父エスガイの代からタイチュウト氏族と兎角うまくゆかず、事毎に反目し合つてゐることを知つた。もともとタイチュウト氏族は、ボルジン氏族に属してゐたが、アムバカイが二代目の汗になつた時より獨立して別に聚落を持ち、タイチュウト氏を称するようになったもので、両氏族の間は謂^いわば主家と分家の關係にあつた。併し、エスガイが汗となる頃からアムバカイの子供たちはタイチュウト氏族として次第に勢力を張つて、他の多くの氏族を自己の傘^{かさ}下に収めるようになり、現在とはかくエスガイの命令に服さないことが多く、モンゴル部内の悶着^{もんちやく}のすべてはここに根差してゐた。

モンゴル部にはタイチュウト氏のほかに、尚幾つかの氏

族があつたが、いまはボルジギン氏かタイチュウト氏かの孰れかに属し、全モンゴル部族は表面はエスガイを汗として一つに纏まっていたが、実情は二つの陣営に岐れていると言つてよかつた。

モンゴル部内がこのような情勢であるところへ、更に他部族との小さい抗争が絶えなかつたので、エスガイは毎日を忙しく送っていた。他部族で最も大きい勢力を持つてゐるものはタタル族で、モンゴルとタタルは昔から大狼もただならぬ關係にあつた。蒙古高原に於ける一番大きい問題は、昔から各部族を一丸とした部族連合体を結成することにあつた。同じ蒙古高原に生活する遊牧民族として、連合体の結成はお互いが平和に生活する上にも、更に大きい高原の隣国である金や西夏や回鶻に対する問題を処理する場合にも、絶対に必要なものであつた。この蒙古高原の諸民族の連合体の結成を一番望んでゐないのは、長城を境として高原に隣接している金国であつた。高原に散在する少数勢力が合して一つの大きい勢力となることは、金国にとっては決して悦ぶべきことではなかつた。金国は高原に連合体の結成の機運が動くときとみるや、常に策謀をもつてそれを摘み取り、高原の諸部族を常に対立状態に置くことに力を尽して來ていた。

モンゴル部の最初の汗カブルも、二代目のアムバカイも、

三代目のクトラも、そして現在のエスガイも、常に連合体を結成する志を持っていたが、それはいつも金の謀略に踊らされるタタル族のために邪魔されていた。カブルはすんでのところで金の使者に依つて毒殺される目にあつてゐたし、アムバカイはタタル人の手によって金国に送られそこで処刑され、クトラも、そしてその六人の兄弟の大部分も、タタル族との闘いに生命を落してゐた。つまり鉄木真の曾祖父も、祖父の兄弟たちの多くも、タタルとの闘いに生命を喪つていたのである。

鉄木真が生まれた時の合戦で、エスガイは初めてタタル族に大きい打撃を与えることができ、それ以後両部族間には比較的平穩な状態が保たれていたが、併し、両部族の抗争は、背後に金国がある限りいつかは再び爆發すべき性質のものであつた。

少年の鉄木真はモンゴル部族の敵として、タタル族と金国のあるのを知つたのであつた。鉄木真はタタルという名前も、長城の向う側にある金という大国の名前も、共に不気味な悪魔の名として心に刻みつけた。

ある時エスガイは幕舎の中で酒を飲みながら、

「タイチュウトをやつつけ、タタルをやつつけるまでは、俺はなかなか死ねぬわい」

とそんなことを口走つたことがあつた。その時それを聞

いていた鉄木真は、なぜ父親がタイチュウトとタタルの次に金という名を挙げなかったか訝しく思った。それでその疑問を口に出して言うのと、エスガイは、

「金をやつけるのは大変なことだ。いまの蒙古高原の諸部族を全部糾合できた場合を考えても、兵力は二十万にはなるまい。それに反して、金はそれに何十倍かする強い軍隊を持ち、兵隊たちは一人一人、お前などが想像もできない優れた武器を持っている」

そう言って笑った。そして仇敵との闘いのことは打ち切つて、長城の向うの金という国やそのまた向うの宋という国のことを話してくれた。そこでは巨大な城郭に囲まれた地域に人々は都市を形成して住んでおり、一生動かすことのない土や板で造った家屋を構えている。人々はそれぞれ専門の仕事を持ち、商人は店舗を造って商品を売り、百姓は土地を耕作して農作物を作り、役人は役所に通って諸事百般の仕事を通り、兵隊は武器を持って毎日戦闘の訓練に明け暮れている。そしてその城郭の中には大きな寺や役所が石で造られて天に聳え立っている。

鉄木真は本当にそんな夢のような国があるのかと思った。もともとと詳しく知れたかった。

鉄木真は、父にいろいろなことを根掘り葉掘り訊いた。併し、エスガイ自身、自分の眼でそれを見たわけではな

ったので、それ以上詳しく話すことは出来なかった。

そうしたことがあってから、鉄木真はある時宋や金という国のことを、ブルテチュに訊いたことがあった。何でも知っているブルテチュなら、あるいはいろいろなことを話してくれるかも知れないと思った。すると記憶のいい老人は、

「厭な国じゃがな」

と前置きして、鉄木真の知りたいことには触れず、いかに厭な国であるかの例証として、金国で処刑されたアムバカイ汗のことを話してくれた。

「アムバカイ汗はタタル人の手で捕えられて金国の王の許へ送られ、そこで、何と木の驢馬に釘付けにされ、生きながらにして皮を剥がされ、その軀をこま切れにされてしまったのじゃ。アムバカイ汗は気丈なお人じやったによって、死ぬ時一緒に行った下僕のブルカチに、生あって国へ帰らば伝えよ。——汝ら、十本の手の指の爪が全部擦り切れ、更に十本の指全部を失うとも、必ず我がために仇を報ぜよ。——こう言われたのじゃ。ブルカチは逃れて国に帰り、そのことをみなに話した。みんな泣いた。お前の父も泣いた。わしも泣いた」

そのブルカチは既に死んでしまっていたが、鉄木真はその小柄な老人を何年か前母の膝の傍で見たことがあった。